

報告要旨

ビアトリス・ポッター・ウェップの福祉社会経済学 —基本問題・スペンサー・マーシャル・社会経済学・福祉政策—

長岡工業高等専門学校（名）佐藤公俊

1、はじめに

社会運動家や社会学者として知られる、ビアトリス・ポッター（1858年生-1943年没、シドニー・ウェップとの結婚後はビアトリス・ポッター・ウェップ）は富裕な資産家の鉄道王の家に生まれ何不自由なく育った。ビアトリスは、当時の社会学の第一人者で家庭教師でもあったハーバート・スペンサーの薫陶を受けて、少女時代から貧民の窮状と労働者の貧困の問題に心を痛め、その救済や問題の解決・解明を願ってきた。1880年代ロンドン社交界にデビューした時でも、自身の基本問題として貧困と貧窮の解決を目指した個人活動として、ロンドンの貧民街で慈善団体のボランティアに従事した。ビアトリスは社会奉仕活動として、オクタビア・ヒルらが創設した慈善組織協会 COS のボランティアをつとめ、貧窮者向けの低所得者住宅の居住者からの家賃徴収人の仕事を請け負った。

しかし、ビアトリスは社会的貧困と貧窮の撲滅を願っても、個人的に慈善活動で貧窮者救済をするだけでは、貧困と貧窮の社会的解決に不十分であると悟り、防貧のため貧困・貧窮を作り出す原因を解明しようとして、劣悪な環境で低賃金の苦汗労働に携わる女性労働者の社会調査をおこなった。彼女は都市で働く女性の貧困の原因の一つを苦汗労働がなされるスウェッティングシステム（苦汗制度）にあると規定し、スウェッティングシステムをなくすために潜入調査を行って、苦汗産業の実情を調査し、苦汗労働の専門家として議会の委員会で証言した。

社交界の交際で、若き慈善家・社会調査の専門家のビアトリス・ポッターは、自由党の若手リーダーのジョゼフ・チェムバレンと知り合い、恋愛感情を持った。しかし、ビアトリスは、公衆衛生対策の都市政策においては、ガスと水道の都市改革主義者で自由党の若きリーダーのチェムバレンの経験と知識にかなうはずもなく、また彼が家庭の天使として家庭に入ることを望んで求婚したため、勝ち気で女性の自立を志す彼女はその求婚を未練ながらに断った。失恋の痛手のまっただ中で、彼女は、チェムバレンの都市改革策と異なる角度から防貧の理論を探ったのであろう。彼女は、1886年年初から貧困・貧窮の原因を「診断」し防貧策を提起できる理論を求め経済学説を研究したのである。

本報告では、ビアトリスの修業と徒弟の時代末期の 1886年～1887年春の、マーシャル経済学の方法を参照しつつの経済学的自律化と、政策論／政府介入主義への移行と立脚による恩師のハーバート・スペンサーの個人（進化）への放任主義からの独立に注目し、彼女の初期の社会学的経済学としての社会経済学としての意義を把握し、その後のナショナル・ミニマムと福祉社会体制論に至る方向性を俯瞰する。

そこにおいては、ビアトリスの経済学的自己形成における初期の社会学的経済学としての意義と、社会原理的な観点から新たに提起した経済学の意義が重要な論点である。さらには、ビアトリスの福祉社会と福祉社会体制の研究におけるフェミニズムのジェンダーと

の関係も重要であるが、本報告では触れるにとどまる。

2、マーシャルの参照と新たな経済学の方向性

社会奉仕活動の時期、チェンバレンとの恋愛の破綻の惨憺たる思いの中でビアトリスが1886年1月からとりかかった経済学説研究における新たな経済学を検討しよう。彼女は貧困問題の「治療」のため、その一般的・社会的な解明・「診断」(diagnosis) (Webb, B. diaries) ができて、貧困を生産する原因となる社会経済状況を把握し、防貧策をたてうる理論を求めて研究を始めたといえる。ビアトリスが直接の「診断」のための社会理論でなく経済学説を研究したのは、ジョゼフ・チェンバレンへの対抗意識と、経済学説を社会学的にみる観点があったためであろう。

当時の経済学説研究の成果として彼女は、“The History of English Economics” (「イギリス経済学の歴史」) (Webb, B. 1886) と“The Economic Theory of Karl Marx” (「カール・マルクスの経済理論」) (Webb, B. 1887) を手書き草稿として書きあげた。それらは、彼女にとって残念なことに未発表に終わったが、彼女は前者で「交換価値を有してそれゆえに貨幣のタームで測定しうる」人間性の部分についての「真の経済科学」を提起したのである。それは、当時の経済理論の新しい潮流であるマーシャルの“The Present Position of Economics” (「経済学の現状」) (Marshall, A. 1885) の方法を、倣ったとは言えないが参照した議論であった。

1886年当時の草稿と日記から彼女の経済学説研究の詳細を確認でき、新たな経済研究者としてのビアトリス像の把握が可能である。報告者が英文タイプ書きに直した彼女の手書き草稿「イギリス経済学の歴史」の検討から、若きビアトリスの経済学体系に関する論点として、古典派政治経済学原理批判と新たな経済学と経済学者の任務の提起を挙げたい。それらは、①スミスの改革者としての評価、②ビアトリスのリカード政治経済学原理批判、③ビアトリスがマーシャルに見出した正統派からの救い、④ビアトリスの新しい経済学の観点：経済現象の三層構造、④-1.I 経済学の心理的現象、④-2.II 物質的現象、④-3.III 物質的要素と心理的要素の両方を含む現象、⑤交換価値の測定の「多くの『攪乱の原因』」、および、⑥能力と欲望の退化という社会病理の診断法である。

こうして、ビアトリス・ポッターの経済学的自己形成における初期の社会学的経済学の社会原理的な観点から新たに提起した経済学の意義としては、ビアトリスが「イギリス経済学の歴史」で経済学体系構想を出発させ、マーシャルの「経済学の現状」での経済学 Economics の方法を参照して迂回し、欲望と能力の結合から新たな経済学体系を構想したことにある。彼女は「真の経済科学」を提起して、経済理論の新構想を提示した。すなわち、彼女は、「イギリス経済学の歴史」のなかで、つながる人間関係を社会的本質・原理とし、その人間関係における欲望と能力が経済的な欲望と能力として現れ、経済的欲望と能力とのつながりを交換価値関係とし、それらの本質・原理の社会的現象を心理的、物質的、および、心理的/物質的の三層で把握して表現する新たな経済学を提案したのである。これは社会経済関係を原理と形態と実体とで把握する方法に通ずるものであり、また、ビアトリスは、マーシャルに反発しコントに倣い、経済学を社会原理から社会経済の領域関係へと体系的に展開しようとしたのである。

3、マーシャルの参照と社会学的経済学：社会経済学

ビアトリスの上述の社会原理的な社会学的経済学は、マーシャルの「経済学の現状」における経済学と社会学とコント的な領域区分と前提は同じであり、彼女の対象領域はコント的な社会の人間の本質の活動領域から、社会学的原理の経済関係へ現象する関係であった。しかし、マーシャルの演繹法的オルガノン(理論装置)の方法を参照しつつも、彼女はそれに対してさして注意を払わなかった。マーシャルが市場経済と外部の社会関係を区別することで、コントと異なり、市場経済と外部の経済領域を、社会経済の同次元の現象領域でとらえて関係づける社会経済的観点に移行していたためなのであろうか。社会経済的観点があるとはいっても、彼は、オルガノンにより、政治経済学 *political economy* ではなく、市場経済を中心に理論化した 経済学 *Economics* をまず構成してゆくことを、研究戦略として選んでいるのである。

こうして、ビアトリスの社会と経済の把握もコントに基づくものであり、「イギリス経済学の歴史」では、まだ、マーシャルが新たに提起した *Economics* の領域にも社会経済学的対象領域にも気づいてはいない。後のシドニー・ウェットとの共同研究では、彼女はシドニーとともに、市場経済理論ではマーシャルの *Economics* に依拠するのである。また、帰納主義を好む彼女の当時の推論方法は演繹的ではあっても、オルガノンによる事実の意味付けではなく、人間の本質が個人において社会的現象や経済現象として表現されるものであった。それは社会一般—特殊経済という関係を有する領域における、主体としての人間の本質・原理が市場社会に現象する関係であって、近代社会ではそうした市場経済関係が社会経済全体を規定するという個人主義的な社会学的経済学の方法といえるものであった。

ビアトリスは、後にマーシャル的な *Economics* に依拠するが、彼女の初期の社会学的経済学には社会経済学的な意義として、コント以来の社会学的な社会経済学としての側面と、原理的な観点から新たに提起した経済学の間接理論的な社会経済学の方向性があるのである。

4、スペンサーからの独立:社会的病理の診断、古典派政治経済学原理の修正理論、政府介入主義

彼女の 1886 年～1887 年春の経済学説と理論との研究成果とそこにおける古典派政治経済学原理への批判において、彼女は社会的な貧困問題の解明・解決のため、貧困の原因を「診断」できる経済学を求めて研究し、古典派政治経済学原理を批判し、古典派政治経済学原理を社会的病理の診断ができるように修正した経済理論と、防貧策としての政府介入を求めた点を挙げる事ができる。ビアトリスは「イギリス経済学の歴史」で、古典派政治経済学原理の批判を提起して、政府の介入政策を想定する介入主義的社会経済学の方向性を示したのである。

1886 年後半のビアトリスとスペンサーとの「イギリス経済学の歴史」を巡る「論争」はこれまでほとんど注目されてこなかった。この知られざる「論争」の意義を詳しく検討しよう。

1886 年 9 月始めビアトリスは完成した「イギリス経済学の歴史」のアブストラクトをスペンサーに送った。その内容に対して、進化的・生物学的社会哲学の師であるスペンサーから、古典派政治経済学の原理を適用する方法の混乱として、手厳しい批判を受けた。師の批判に対し、ビアトリスは日記に「H.S. (ハーバート・スペンサー) は歴史的感覚がない」と書いて、師に提出こそしなかったが強調して「反論」を意図したのである。この「論争」において、ス

ペンサーは、古典派政治経済学原理第一主義と自由放任哲学から彼女の理論を批判した。ビアトリスは「反批判」して、古典派政治経済学の原理の現実から乖離した 19 世紀後半の貧困問題という社会的「病状」の「診断」のための新たな理論と、対策としての政府介入の必要性の問題を提起したのである。

後年のビアトリス・ウェブの貧困問題解決の方策は、シドニー・ウェブと結婚後の Partnership (共同事業) の一環である共著『産業民主制論』(1897 年) で示された。(ビアトリスがシドニーとの共同事業時代を自伝的評伝の第 2 巻で *Our Partnership* (『私たちの共同事業』) (Webb, B. 1948) という題で論じている)。『産業民主制論』では、ナショナル・ミニマムを法律の基準とした政府の政策による企業への最低現規制によって、一方では、全ての労働者に最低限の人間らしい労働条件を保障し貧困化を防止して、労働者の健全性と生産性の向上を促す。他方では、そうした条件を確保できない非効率な企業を寄生的と呼んで政策的に排除して、低効率な低賃金労働、特に苦汗労働を社会的に淘汰・撲滅することによる社会改良の方策が社会進化として示されているのである。ここに進化経済学としてスペンサーの進化論の継承の面があるといえる。

5、福祉政策：社会経済学的政策論

ビアトリスは、上述の「論争」を通して多面的な変化を見せた。彼女は、古典派政治経済学原理の信奉者でなく、防貧という政策目的の立場から社会経済学的政策論と介入主義へと移行し、古典派政治経済学原理を修正を自覚したのである。すなわち、彼女は、スペンサーから進化主義を受け継ぐも、スペンサーの政策論である個人主義的自由放任論に対立した。彼女は「イギリス経済学の歴史」での人間の本質・原理が現象する社会学および政治経済学の原理の観点から、市場と政府の各領域の現象間の社会経済学的相互関係の立場を強調し、そこにおける救済と防貧のための政策的介入策と政府の介入による進化を強調し、制度形成の方法を取ったのである。その実践は、ビアトリスが歴史主義として、学問的には社会科学の諸領域間の関係と各社会領域間の現象の関係を論ずる社会経済学の観点に移行したことを意味するのである。

こうして、ビアトリスは〈スペンサーの歴史的センスのなさ〉を批判することで、師の立脚する古典派政治経済学原理と自由放任哲学とから決別し、自身の基本問題にそった介入主義と社会経済理論を自覚し、社会経済学者として福祉国家政策化の認識を示し、もう少し後では、集合主義的社会主義者として、師から実践的にも独立した道を歩むこととなったのである。

6、まとめ

ビアトリス・ポッターは、経済理論の研究では、当時の新進気鋭の経済学者アルフレッド・マーシャルの経済学の方法を意識し反発して、社会学的経済学としてコント的な社会学的原理からの理論構成を試み、また、スペンサーが背景とする古典派政治経済学原理を批判し対抗することによって社会経済学的理論と政策を形成していった。ビアトリスの 1886 年後半における、社会学的経済学と政策介入論の観点から、社会経済的な各領域間の現象の関係を論ずる観点への移動と共に、彼女の経済学の自律点が形成されたといえよう。さらに、個人主義的な社会経済学的政策論の観点は、彼女の後の集団や生産関係同士の集合的で制度的な社会経済学と

福祉国家体制論・福祉社会経済学へと展開していったのである。

このようにしてビアトリスは経済理論研究者として自律し、恩師のハーバート・スペンサーから独立し自立した社会経済学者となっていた。彼女は、その後結婚前のビアトリス・ポッター時代に集産主義的社会主義者となったことは広く知られているが、こうした青年時代の経済学説研究が彼女の熟年期の制度進化的社会経済学の原点となったのである。

結論としていえるのは、ビアトリスの福祉社会経済学と、その前提する社会経済学は社会経済の領域論で制度経済学であること。そして、それは市場経済と外部の経済の領域の区分と関連、および、それらへの社会的労働編成の社会的必要的な連結性向という新たな視点をもたらす意義あるものであることである。我々は社会経済学にもとづいた福祉経済学や福祉社会論を構築するため、コントやスペンサーやマーシャルの社会学・経済学を受け継ぐビアトリス・ポッター・ウェブの社会経済学的研究と問題意識とを批判的に継承・展開してゆかなければならない。

引用・参考文献

Webb, B. [1886], “The History of English Economics”, PASSFIELD Collection, 7/1/3,1886

Webb, B. (Potter, B.) [1887], “The Economic Theory of Karl Marx”, PASSFIELD Collection, 7/1/5

Webb, B. [1926a], *My Apprenticeship*, Longmans, Green and Co., New York, 1926. Paperback edition published by the Press Syndicate of the University of Cambridge, 1979

Webb, B. [1948], *Our Partnership*, Longmans, Green and Co., New York, 1948

Webb, B., *Beatrice Webb's Diaries*,

<http://digital.library.lse.ac.uk/collections/webb>,

“Beatrice Webb’s Typescript Diary, 15 February 1886-December 1888”

Marshall, A, “The Present Position of Economics”, 1885, in *Collected Essays 1872-1917*, OVERSTONE PRESS, 1997 (アルフレッド・マーシャル, 『経済学論文集』, 岩波ブックサービスセンター, 1991年)

佐藤公俊：ビアトリス・ポッターの1886年論文 *The History of English Economics* の原稿のトランスクリプションと解説 (1), 『長岡高等専門学校研究紀要』第46巻, 2010

佐藤公俊：ビアトリス・ポッターの1886年論文 *The History of English Economics* の原稿のトランスクリプションと解説 (2), 『長岡高等専門学校研究紀要』第48巻, 2012

佐藤公俊：「ビアトリス・ポッター（・ウェブ）の経済学研究：1886年の独立；“The History of English Economics” 草稿へのハーバート・スペンサーからの批判への反論」、『社会理論研究』第15号掲載、平成26年11月